
吹険！～吹奏楽部×ファンタジー！？～

碧。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吹険！〜吹奏楽部×ファンタジー！〜

【Nコード】

N5148Z

【作者名】

碧。

【あらすじ】

目を覚ますと、そこは異世界だった。世界を救うのが中学生の吹奏楽部でいいんですか！？とにかく、いざ冒険に出発です。

アフタクト1（前書き）

Fantasy in the percussion!？の元の作品です。

前の作品を読んだ方で嫌だな、と思った人は気をつけてください！

アフタクト1

どうも、嘉田です。『Fantazy in the Perc
ssion!』の元ネタ、この『吹険!』では二年下としての
キャラとなりますがまあよろしく願いします!

とりあえず主人公メンバーはパークスメンバー四人ではなくなり
ます。うちが一年としての設定なんでパークスメンバーは何人か出
てきますが、「パークス」が主人公ではないですね。

まあ、これからもよろしく願いします!

突然異世界の揉め事へ巻き込まれた者達は。

「地球」では出会う事の無かったただろう者達で。

見つかる事の無かった運命を見つけるだろう。

初めて出会った者同士はその出会いを喜び。

以前から共に居た者には、新たな発見をする。

その「運命」は呪うべき物なのか、祝うべき物なのか

「成実、皆はどこ?」

「それが、居ないんだよ」

気が付いたら知らない場所に居ました。

今の現状はその一言に尽きますね。

事の発端は多分、ほんの数分前のこと。

うち達が先生に頼まれて学校の倉庫に物を取りに行ったのが原因、
なのだろう。

上手く、思い出せないけれど……数分前の事なのになんでなのか
な？

アフタクト1（後書き）

パーカッションでなく、吹奏楽部全パートが出ます。
設定は少し変わってますので、ご了承ください。

アフタクト2(前書き)

二話目です。そして、超・ぶっ飛び・展開です。

アフタクト2

「????」

「長老！」

一人の少年が街の外れにある家へと駆け込む。

「大変なんだ、女王様が……っ」

「知っておる」

少年 トオイに長老、と呼ばれた老人は水晶球を覗いている。

「全てこれで見えておる。突然女王は何をいいだすのじゃ……！」

「なんで、急にあんな事を」

この世界の女王、アリーチエ。彼女は最高の女王、だった。

アリーチエに世界の住人が出された条件は、

『自分の気に入る演奏をすること』

それだけならまだ良かった。

『但し、少人数での演奏は不可。二ヶ月以内にそれが叶えられない場合』

『叶えられるまで、一週間ずつ税を上げていく』

それが、幸乃達の世界なら。

簡単な事だっただろう。

しかし、この世界は。幸乃達の世界で言う、「合奏」を知らない。
音楽の世界、とは言えど、「趣味」に近いのだ。

バンド程度の人数のものはあるが、オーケストラといった、多数の合奏は知らない。

二ヶ月なんて短い間では、楽譜を作るだけで時間が過ぎてしまう。

女王の満足できる演奏は、できない。

「女王が別人になったとしか思えん命令じゃな」

「どうしよう、無理だよ……！」

「わしに考えがある。少し待っててくれ」

水晶球を持ち、立ち上がる。

「異世界に道を開き、それができる者達をこの世界に連れてくる」

「え？」

「助けを求めるのじゃ。異世界の者達に」

水晶球に手をかざすと、それは薄暗く光った。

「『我、異世界の者呼び出す。汝、その声に応えよ』」

瞬間、太陽のように水晶球が輝いたかとおもつと、

衝撃が長老を襲った。

「長老！」

「いたたた……大丈夫じゃ、これで呼ぶ事には成功したはずじゃ」

「でも長老さつきこつちまで振動がきたのに……本当に大丈夫？」

「まあな。この魔法は一年経たんと使えんが……本当に大きい魔力が必要じゃからな」

異世界から異世界の者と呼ぶ、という行為。

それだけ、魔力の消費は多い。

「魔力の回復もできんしな。あとは時間を止める魔法をかけるか」

「長老まだ魔力残ってるの！？」「

「まあな。だが……時間を止めてしまえば、もう魔力はほぼ0じゃな」

だが、止めなければ、異世界で不都合が起こってしまう。

長老は、もう少しで閉まりそうな、歪みに向かって、魔法を唱えた。

「これで大丈夫じゃ」

「ねえ長老、その人達大丈夫かな？」

「すぐに街にやってくるじやろう。だから迎えに行くぞ」

「分かった！」

二人は家をでて、街の中央の広場へと向かった。

この世界の希望となる存在と出会ったために。

アフタクト₃(前書き)

ようやくプロローグ的な何かが終わります。

アフタクト3

「成実」

「何？」

「一つ聞きたいんだけど、ここどうなって来たんだっけ？」

「……覚えてない、の？」

「うん、なんか。成実はどう？」

「覚えてるよ。しっかりと」

その返答に、うちは首を傾げた。

「なんで覚えてないんだろ」

「じゃあ、話したら思い出すかもしれないし説明しようか？」

「お願い」

「とりあえず……僕達が先生に頼まれて体育館裏の倉庫に行ったのは覚えてる？」

「うん。あつこは学校の七不思議に数えられてるんだよね。あれは怖かった」

薄暗い、体育館裏の倉庫。想像すると背筋が凍る。

先生は七不思議の噂を知らないから……大丈夫みたいだけどね。

「なんだっけ、楽譜を取りにいったんだよね。入ったところまでは覚えてる」

「正解。じゃあそこかな？」

倉庫にはいままで使われてきた楽譜も置かれている。

音楽室に置くスペースが無いので、ファイルに閉まって倉庫に整理されているのだ。

代々残されてきていて、捨てるわけにも行かないのである。

うち達は、先生に頼まれて『Let's swing』の楽譜を取りに行った。

「僕達が扉を開けたら、倉庫の中が歪んで、次の瞬間僕達はその歪みに吸い込まれちゃった　って所かな？　どう、思い出せた？」

「うーん……あんまり。ごめん」

「別にいいよー。それより皆を探さないと。とりあえずこの場所に行ってみない？」

指差された看板。そこには「animate」と書かれていた。

「それがいいかも。多分街だよな」

「じゃあ行こうか」

うちと成実是他愛も無い事を話しながら看板の指し示す方へ向かった。

この世界の一大事に巻き込まれるとも知らずに。

アフタクト3(後書き)

さて、次はanimate。いちいち街の名前をアルファベットで打つのがめんどくさくなってきてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5148z/>

吹険！～吹奏楽部×ファンタジー！？～

2011年12月17日20時52分発行